

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
<p>◆ 目指す人間像 進取の気性、敬愛の精神、雄健な心身を備え、新たな価値を創造する人。</p> <p>◆ Mission 主体的・探究的な学びをとおして、確かな学力と挑戦心を育み、変化の激しい社会を逞しく生き抜く基盤を培う。</p> <p>◆ Vision 学習活動や特別活動が高いレベルで充実しており、難関大学進学にも信頼のおける「生徒が育つ学校」となる。</p>	<p>◇ 学年集会・個別面談・学校行事等、様々な機会をとおして、挑戦することの意義・必要性を訴え続けた。高い進路目標を堅持し、先を見据えて粘り強く学習を続ける生徒が前年度同様多く見られた。</p> <p>◇ 校内研修や互見授業を充実させるなど、生徒が自ら学ぶ授業の実践に向けた研究を進めるとともに、探究活動や効果的なICTの利活用をとおして、能動的に学びに向かう態度の育成に努めた。普通科総合的な探究の時間を進化させることができ、今後は地域貢献や地域企業との連携をさらに深めていく。</p> <p>◇ 模擬試験の結果分析を踏まえた授業展開の見直しや、目的意識を持って受験に向き合うよう内容・形態を工夫したスパートゼミの実施など、希望進路の実現に向けた取組を充実させた。</p> <p>◇ 文化祭・体育祭等の学校行事を前年度以上に生徒主体の活動として実施できた。中・短期の海外留学に挑戦する生徒も多く、STEMプログラム等の国際交流と併せて生徒の国際性を育むことができた。</p> <p>◇ ターム留学を予定どおり実施することができた。留学後の教育活動への波及効果の研究を進めるとともに、円滑で安定した実施の検討を進める。DXハイスクール事業においては専用教室を整備し、取組内容が充実・発展するよう研究を進める。</p> <p>◇ 健康教育をとおして心と体の成長を大切にするとともに、他者を大切にできる態度の育成に努めた。人権学習において多様性を尊重し、人権を大切にする姿勢を養うことができた。</p> <p>◇ 前年度までに整理した業務改善策により、業務負担の軽減が見られるとともに、勤務時間の縮減にも繋がった。</p>	<p>① 挑戦することが「南陽の文化」として定着するように、生徒への指導及び保護者への働きかけを継続する。さらに、挑戦する教職員の姿を示すことで生徒の挑戦心を高める。</p> <p>② 生徒が自ら学ぶ授業への改善、探究的な学びの実践、授業におけるICTの効果的な活用を実現するための研修・研究を充実させ、自らの興味関心や進路希望に合わせて主体的に学び考える力を育む。探究活動を活性化させるため、外部への発信を強化する。</p> <p>③ キャリア教育の視点を軸とした進路指導のもと、質の高い授業、スパートゼミ、進学講習、自学自習を支える教材の開発・提供を効果的に組み合わせ希望進路の実現を図る。</p> <p>④ 生徒が企画・運営する学校行事・国際交流等の深化、生徒会活動・部局活動・地域連携活動の活性化など、生徒の主体的・協働的な活動や社会貢献・参画の機会を充実させる。</p> <p>⑤ 中高一貫教育のさらなる発展を目指した改革を実現させるため、STEAM教育及びターム留学を軸とした教育内容の深化を図る。DXハイスクールの継続指定を生かし、情報に係る教育を推進する。</p> <p>⑥ 互いの人権や多様性を尊重し合い、信頼と思いやりで結ばれ、ともに成長できる人間関係を育む。心身の健全な発達を促すための取組を充実させる。</p> <p>⑦ 教育目標をより明確化することで業務の効率化を推進し、ワークライフバランスに係る具体的な取組を着実に実行する。</p>

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
教務部	生徒が自ら学ぶ授業への改善、授業におけるICTの効果的な活用を実現するための研修・研究を充実させる。	生徒の興味関心を高めながら、生徒が自ら学ぶ授業実践を研究するとともに、内容を共有し協議する機会を設けるため、授業公開週間を6月と11月に設定する。	A	A 授業公開週間、教職員研修や教科会議等を通して、生徒の主体的な学びのための授業実践の内容の共有を図り、協議を重ねることで授業改善に取り組むことができた。今後も継続してICTを活用した主体的な学びの実践を研究するとともに、生徒の学習活動における主体性を育成するための取組を充実させたい。
		授業公開週間や教科会議を中心に、主体的に学習に取り組めるように学習の見通しや振り返りを通して教員の学びや変容について議論する機会を校内研修などで設定し、授業改善に取り組む機会を増やす。	A	
		生徒に興味関心を持たせ、主体的に学び考える力を育むためのICTの効果的な活用方法について実践研究し、授業公開週間を中心にその内容を共有し協議する。	B	
生徒指導部	生徒の主体的な活動を支える。	生徒会や各種実行委員会と連携して、生徒が主体的に学校行事を企画・運営する能力を養い、「生徒が作り上げる学校行事」を実現させる。	A	A 学校行事全般において生徒が企画・立案し、教員が調整するという役割分担が定着した。部活動顧問間の連携、協力体制については、特定の部活動間では十分な連携が取られているが、学校全体としてさらなる連携を図りたい。
		生徒主体の効率的かつ合理的な部局活動ができるよう、顧問をはじめとする関係職員との連携を密にする。	B	
		生徒会役員と連携し、生徒に主体的かつ協働的な取組ができるよう促す。	A	
	組織的な生徒指導を実践する。	生徒の状況をきめ細かく観察し、生徒の心的変化を共有できる体制を構築して、全教職員で一貫した指導を行う。	A	A 本年度より生徒指導部内にも特別支援コーディネーターを配したことで、担任との連携が密になり生徒の状況把握をスムーズに行うことができた。
		特別支援教育的観点から個々に応じた効果的な指導を行うとともに、協働的活動を支援する環境を構築する。	A	
		生徒指導事案が発生した際は、関係教職員・家庭との連携を迅速に行うとともに情報共有を円滑に行う環境を構築する。	A	
生徒・教職員の人権意識の深化を図る。	教職員の人権意識の深化と具体的実践を促すため、教職員の人権教育研修会を適宜実施する。	A	A 人権研修を通して、多様な生徒への対応や人権意識の醸成を図ることができた。	
	地域の団体や教育機関と連携しながら、生徒の人権意識を高める活動を企画・実施する。	B		

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
進路指導部	主体的学習者の育成 ～「生徒の学びたい」を刺激する～	学年との連携を密にして効果的なキャリア教育実を立案・実施し、希望進路を実現するための進路指導の協働体制を強化する。生徒が自身のキャリアを選択・決定していく姿勢を支える。	A	A 本年度はキャリア教育講演会を新規で実施した。社会で働くという視点から、高校での学びと社会との関わりについて考える機会を設けることができた。また、高3用自習室の座席数を増加することができた。 低学年向けの自習室の利用率向上と進路委員の活用が今後の課題である。
		魅力的な自習室を整備し、自学自習の学習環境・形態を学校としてサポートする。	A	
		進路委員を中心として、生徒が進路行事等に積極的に参画する体制を整備し、生徒と共に本校の進路指導を創る。	B	
	希望進路の実現の支援	進学講習の内容を教科・学年と検討・調整し、確かな学力の定着を目指した進学講座を編成・実践する。	A	B 進学講習の検討や運営に各教科・分掌が協力する体制を構築できている。しかし、スパートゼミや夏期冬期講習の参加者数が想定よりも少なかった点は課題である。 模擬試験の分析方法を今年度から刷新することで、生徒情報共有の即時性は向上した。しかし、教員間での意見交流の機会が減少した部分もあるので、今後は実施方法について考えたい。
		難関大学進学希望者に対しては、「スパートゼミ」等への取組を通して、主体的・自立的に学ぶ力を身につけた集団を育成する。	B	
		各模擬試験データを学年と進路指導部の協働体制で分析し、情報を教員間で共有することにより、見通しをもった指導を行う。	B	
保健部	「自分の健康は自分で作り、守っていく」という意識を育む。	保健委員会発行の「well-being」や保健室だより、学年ごとの健康教育を通じて、正確かつ時事的な知識を伝える。	A	A 「Well-being」は学期毎に計3回、「保健室だより」は年間で16回発行した。また、各学年で健康教育講演会を開催し、正確で時事的な知識を伝えることができた。来年度は講演内容を適宜見直し、心身の健康について生徒自身が主体的に考える時間になるようにしたい。
		欠席連絡フォームや健康調査、教職員間での情報共有を通じて、生徒の心身の健康状況を把握し、生徒に合わせた適切な対応を行う。	B	
	支援を必要とする生徒に、組織的・継続的に対応する。	学年部や教科担当者等と連絡を密にして生徒情報を共有し、学校適応指導会議とも密に連携を図る。	A	A 特別な支援や配慮を必要とする生徒は年々増えており、個に応じた適切な対応が多く求められた。南山城支援学校の支援センターとの連携や、家庭との情報共有に努め、本校での支援のあり方を模索した。欠席連絡フォームの入力の徹底など、今後も丁寧な情報共有を行いたい。
		特別支援教育コーディネーターとの情報共有に努め、必要に応じて外部の関係機関との連携を図る。	A	
	「自分たちの学習環境は自分たちで整える」という意識を育む。	清掃用具の整理等の美化委員会活動、教職員による清掃指導の充実を通じて、校内全体の美化意識を向上させる。	A	A 特別清掃時に各清掃場所へのバケツセットの設置や、黒板消しクリーナーの清掃、モップの交換など、美化委員が積極的に活動に取り組み、校内の美化意識向上の要となってくれた。今後もバケツセットや清掃目標を有意義に活用し、さらなる美化に努めていきたい。
		月例清掃等を試験等の行事前に設定し、場にふさわしい環境を整える。	B	

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題	
図書部	生徒の主体的な学びにつながる図書館の運営	生徒の学びに応じた本を充実させるとともに、生徒が必要な本を手に取りやすい環境を整備する。	A	A	難しすぎず、易しすぎず、生徒が興味を持ち、その分野の理解が深まるような本を増やし、手に取りやすいように展示できた。イベントのボランティアなどに積極的に参加してくれる図書委員も多く、図書館運営と読書活動の推進に主体的に取り組んでくれた。次年度以降は、読書活動の促進に向けた生徒主体の活動をさらに増やしていきたい。
		図書委員会の活動の企画・運営に関して、生徒の積極的な参加を促し、主体的な委員会活動を実施する。	A		
	読書活動の促進と情報発信の充実	授業や探究活動で利用しやすい本をそろえ、授業や学習を通じた読書活動の推進を図る。	B	A	授業や行事に関連した本を展示し、生徒の学びから読書につながるきっかけを作ったり、読書から授業や行事を深める機会を多く作ることができた。40周年記念誌の作成を通して、この10年の歩みを振り返るとともに、これからの学校図書館の担う役割を考えることができた。生徒に読んでほしい本がたくさんあり、素敵なイベントがたくさんあるが、知らない生徒も多いのが現状である。次年度はもっと多くの生徒に本や図書館でのイベントを知ってもらい、図書館に来る機会が増えるように工夫を重ねていきたい。
		ビブリオバトルや読書月間、団体鑑賞等に関連する書籍を整え、行事を通じた読書活動の促進を図る。	A		
		ICT機器等を活用して、本の魅力や図書委員の活動、図書館のイベントに関する情報をより効果的に伝える。	B		
		40周年記念誌を作製し、独自の文化を記録するとともに、次の世代へ効果的に継承する。	A		

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
探究推進部	広報活動において、ICTの利活用を含む様々な方法を用いて、生徒の活動を校内外へ発信する。	ホームページやSNS等を利活用し、動画等のツールを利用した情報発信を適宜企画・実施する。	B	A	オープンキャンパスなどの広報活動では、これまでの生徒が中心となって学校を紹介するというフォーマットを維持しつつ、留学を経験した生徒の発表を導入するなど、学校の特色やコンセプトを効果的にアピールできるようブラッシュアップすることができた。
		オープンキャンパス等の広報活動において、学校の特色やコンセプト、生徒の活動を適切・効果的にアピールできるよう、企画・運営を行う。	A		
	国際交流活動を通じて生徒の主体性を育成する。	国際感覚を養うため、短期・中期の留学および国際交流活動の選択肢を拡充する。生徒一人ひとりが世界とつながる力を育み、自発的に学びを深められる環境を整備する。	A	A	留学面では、従来から実施してきた国や京都府の留学補助事業へ応募する生徒への充実した支援に加えて、学校独自の留学プログラムであるNEXを立ち上げるなど、生徒が留学する際の選択肢を拡充することができた。また、英語の能力を積極的に高めたい希望者を対象に、外部講師を招いた英語学習プログラムであるNESTを開講し、生徒が自発的に学びを深めることができる環境を整備することができた。国際交流活動に関して、これまで以上に入学希望者も含めた外部の方にアピールできる取組を構築できた。
		充実した留学プログラムの実現に向けて、実践計画の立案に加え、生徒や保護者対象の講演会等の企画・実施を行う。また、帰国後フォローアップ講演会の開催を通じて、留学の価値を高める取組を推進する。	A		
	「ダ・ヴィンチ」「サイエンス」「総合的な探究の時間」の具体化と実践	生徒・教員が探究学習の意義・目的をしっかりと理解し、生徒のキャリア意識を育みながら、主体的に取り組んでいけるカリキュラムを整備し、実践する。	A	A	附属中学校のダ・ヴィンチ、普通科の総合的な探究の時間、SR科のサイエンスの取組について、各担当者の連携・情報共有がこれまで以上に密になったことにより、講演会の開催や各種発表会、コンクールへの参加なども含めてカリキュラムの充実が図られた。また職員会議での教員研修の充実により、探究活動全体に関する職員間の意識の共有を促すことができた。来年度は学校全体が1日探究活動の取組を行う「探究の日(仮称)」を実施するなど学校の特色としての探究活動をより一層充実させたい。
		学校内外への情報発信や教員研修等を通して、教育内容の共有や実践の交流を行い、教員個々の探究学習への理解を深め、日々の実践につなげる。	A		
事務部	主体的、積極的に学校運営に参画する。	事務の専門性を生かしつつ、効果的な学校運営が行われるよう、各分掌・教科と連携しながら事務を進める。	B	B	各分掌・教科と随時連携を図ることにより、学校運営に関する調整を必要に応じて円滑に行うことができた。その結果、事務処理の透明性と迅速性が向上するとともに、学校運営への主体的な参画を実現することができた。
	校内の安心、安全、美化を推進する。	危険箇所を早期発見するため、月1回点検を実施し、計画的に着手するとともに、柔軟に施設管理の改善を行い、教育環境の整備に努める。	A	A	日常点検を継続的に実施することで、施設内の危険箇所を早期に発見し、迅速な修繕につなげることができた。また、施設の不備や破損箇所について情報共有を行い、早期に対応することで、施設管理の徹底と安心・安全な学校運営を実現することができた。今後も、より効果的な予算執行と計画的な修繕・整備を実施したい。

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
第1学年部	キャリアを考える中で幅広い視野を持たせるとともに、挑戦する心を養う。	進路指導部と連携しながら様々な情報発信を行い、幅広い視野と将来の進路への展望を持たせる。	B	A	担任が自らのキャリアを基に学年全体に講話を行うなど、様々な将来の選択肢を提示し、生徒の視野を広げさせることができた。冬期講習においては進路指導部と連携し、習熟度別講座を展開することで、発展講座に挑戦する学習集団を形成することができた。また、留学や国際交流に参加する生徒も多く、多様な経験を積む後押しをすることができた。
		学校行事や部活動、国際交流等、高校生だからこそできる多様な経験を積むことを奨励し、視野を広げさせる。	A		
	自立した高校生としての生活・学習習慣を定着させる。	あいさつや提出物、時間の管理といった基本的な生活を規律あるものにして、自立した学校生活を送れるようにさせる。	A	A	
		授業に能動的に参加することの重要性を説き、家庭学習の習慣を定着させることで基礎学力を定着させる。	A		
		ICT機器を効果的に活用する力を身につけさせ、自己管理につなげる。	B		
	思いやりをもって、主体的に行動できるよう、生徒を導く。	学習活動や学校行事において、自分の頭で考え、自分のことを自分で決める機会を設ける。	A	A	
他者を尊重し、学習活動や学校行事で他者と協働する姿勢を持たせる。		A			
第2学年部	学習活動や多様な経験を通じて視野を広げ、挑戦する姿勢を定着させる。	学習活動や研修旅行、南陽祭等の学校行事において、生徒自身が考えて物事を決定し、実行する機会を多く設ける。	A	A	研修旅行や南陽祭では生徒自身が自分たちで考え企画する機会を設定し、多様な経験をさせることができた。探究活動や文理の枠組みにとらわれない学習活動については、さらなる深化が必要である。
		探究推進部や教科担当と連携し、探究活動を充実させ、文理の枠組みにとらわれず学習活動に取り組むよう生徒に働きかける。	B		
	生き方の問題として進路を考えさせ、自らの目標に向けて主体的に学習する姿勢を身につけさせる。	将来の生き方を見据え、社会との関わりを意識して進路について考える機会を設ける。	B	A	
		授業を大切にさせるとともに、LHRや面談を活用して、生徒が自らの目標に応じ自ら学習課題を設定し取り組むように、働きかける。	A		
	相手を思いやり、他者を尊重する姿勢を持った集団を形成する。	互いに気持ちよく学校生活を送れるよう、挨拶や身だしなみをきちんとし、他者に配慮した言動をするよう指導する。	B	A	
		クラスの垣根を越えて生徒が交流する機会を多く設ける。	A		
		学校行事や進路LHRでクラスの垣根を越えて生徒が交流する機会を設定できた。生徒たちは落ち着いて学校生活を送ることができているが、挨拶や身だしなみについては一部に課題が残るため、引き続き指導していく必要がある。			

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
第3学年部	視野を広く持って高い目標に挑戦する心を育む。	変化の激しい社会に目を向け、自らの進路を自らの意志を持って決定し、着実な準備を行えるよう支援する。	B	A	進路決定に向けて、HRでの指導や面談等を実施し、生徒の主体的選択を支援した。 生徒主体の学校行事を行うよう、支援することができた。
		南陽祭等、学校行事において、生徒が決定、実行する機会をより多く設ける。	A		
	自立した学習者としての学びを支援する。	授業、スパートゼミ、模試を活用した、自立した学習について指導する。	A	A	授業をはじめとして、すべての取組の中で自立した学習者となるよう促し、指導した。 スパートゼミにおいては、難関大学を意欲的に目指す集団形成を実現した。
		適宜面談を行い、自ら学ぶ意欲の高まりを支援する。	A		
	人権感覚を涵養し、多様な価値観を認め合う、すべての生徒にとって居心地の良い環境を形成する。	生徒指導部と連携し、人権学習を適宜実施する。	A	A	生徒指導部と適切に連携し、人権学習を実施した。 清掃活動については、環境整備への意識高揚へ一定の効果あげた。
		教室や施設をきれいに使用し、協力して良好な学習環境を作り出すよう意識づけを行う。	B		
サイエンスリサーチ科	高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)での助成を生かし、数理情報に係る教育活動を推進する。	ハイスペックPCや3Dプリンター等を設置した創造的ワーキングスペース(教室名:N-ラボ)の校内整備を進め、課題研究や授業の充実を図る。	B	A	N-ラボに映像機器や音響機器を設置する等、数理・情報に係る課題研究や授業を行う上での教室整備をほぼ完了した。 外部講師を活用した講演会や実習を通じて、当該分野の知識や先端技術に触れる機会を創出することができた。
		本事業での外部連携先(龍谷大学先端理工学部)の教員や学生を講師に迎え、デジタル社会で必要とされる知識や技術の習得に努める。	A		
	校外との繋がりを重視した課題研究活動を推進する。	近隣の大学や行政機関等との連携プログラム(夏季実習やサイエンス講座)を継続・充実させ、生徒の学習意欲を育む基盤構築に取り組む。	A	A	夏季実習やサイエンス講座等、校外との繋がりを重視した取組を通じて、大学進学後の学びや社会における課題に目を向けさせる「きっかけ」を創出することができた。 統計グラフコンクールや競技プログラミング大会等、外部評価を受ける機会が徐々に増えてきた。
		科学コンテストや学会発表等に関する情報を積極的に生徒に提供し、外部評価(学校の教員以外からの評価)を受ける場に生徒自らが挑戦する意識を高めさせる。	B		

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
附属中学校	学校教育のあらゆる機会を通して人間的な成長を促し、社会や将来に目を向け、生き方・在り方について創造できる人物の形成を目指す。	生徒の安心・安全に配慮しながら、学習活動や学校行事に主体的に取り組ませるとともに、思いやりをもって協働し活動できる集団形成を目指し、豊かな人格形成を図る。	A	A	積極的な学習活動を行う局面が多く見られた。生徒会を中心に新しい行事を運営するなど、主体的に取り組む姿が見られた。部活動や英検受験については積極的な姿勢が見られたが、その他のコンテスト等については周知と風土の醸成に課題が残る。
		学校内外を問わず、部活動やボランティア活動への積極的参加を促す。また、各種検定やコンテストなどに挑戦することを個々に定着させ、活動領域を広げ人間的な成長を図る。	B		
	これまでの中高一貫教育を振り返り、生徒がより真摯に学習活動に取り組める環境を整備し、特色ある教育活動を実践する。	知的好奇心や自己肯定感を高めていくため、授業への取り組み方や学習課題の在り方について研究し、生徒の主体的・探究的な学びを進めていく。	A	A	自立した学習者の育成を目指すビジョンを教科を越えて連携し、主体的学習活動を促すことができた。また、CLIL型学習や校外学習、団体鑑賞、等教科間連携や実験的教育活動を充実させることができた。
		南陽独自のSTEAM教育を実践していくため、「ダ・ヴィンチ」のみならず、あらゆる機教育活動の機会を捉えて、教科間連携や実験的学習活動を重視していく。また、本物に触れる機会を設定することで学びの深化を図る。	A		
大きな視点に立って目標を掲げ、主体的に活動していく姿勢を身につけさせる。	卒業生講話や海外留学・進学の実験を知ることで、目先の進路だけでなくグローバルな視点を持たせつつ、より遠い未来を考察させるようなキャリア教育を体系的かつ段階的に行う。	A	A	グローバルキャンパスチャレンジに向け、ロードマップに基づいて、English Safari やCURIOS WORLD等、本校独自の活動ができた。	
国語科	授業やスパートゼミの質を高め、生徒の希望進路の実現及び社会生活に対応できる伝える力を育て、伸ばす。	難関大学の入試問題を研究し、その成果を授業やスパートゼミでの指導で生かすことにより、生徒の進路実現につなげる。また教科内で適宜指導の成果を共有する。	B	A	生徒の進路実現のため、日々の授業や講習、スパートゼミ等で工夫のある授業を展開した。読書感想文では、高校1年生が毎日新聞京都市局長賞をするなど、本に関心を持つきっかけを作ることができた。
		生徒の知的好奇心を高め、生徒が主体的に学ぶ意欲が高まるような授業を展開するとともに、ビブリオバトル等を活用して生徒に読書のおもしろさを啓発し、生徒の視野を広げる。	A		
	中高一貫を見通した指導体制を整え、さらに充実・発展させる。	生徒を多面的に評価するために、評価方法や評価材料を随時検討・改善し、適切な評価につなげる。	B	B	生徒の多面的な評価のため、評価方法の検討や改善を適宜行った。互見授業週間において、テーマを決め、1人ひとりが工夫のある授業を心がけた。また、その後に意見交流を行うことで効果的な指導を模索した。
教科担当者や学年部と連携することで、教材や生徒に関する情報共有を密にし、中高一貫校の強みを活かした指導を行う。		B			
地歴・公民科	広い視野に立ち、主体的に学習に取り組むことのできる生徒を育む。	中高一貫教育の6年間を見通した指導内容の整理を行い、生徒が自立して学習できるようになるための指導体制を確立させる。	B	A	学習した内容を動画や演劇で表現したり、プレゼンテーションソフトを使用して発表するなど、生徒自身が工夫を凝らして主体的に取り組む授業を実践した。探究活動の視点を入れながらの実践内容や指導内容の整理・共有をさらに進めていく。
		社会的な諸課題を探究する授業や、ICTを活用した生徒主体の授業を実践し、実践内容・評価方法を教科内で検討することで、より効果的な学習につなげる。	A		
	難関大学進学をはじめとする希望進路の実現を支援する指導を行う。	模擬試験の分析や入試傾向の分析を行い、共通テストや個別試験に向けた指導内容を検討・共有する機会を設ける。	B	A	スパートゼミや進学講習を活用し、入試に対する意識づけや論述問題に対応する力を育てることができた。共通テストや個別試験の検討・共有を丁寧に行い、すべての教員で進路実現に向けた取組を続ける。
スパートゼミ、進学講習等を効果的に活用し、生徒の希望進路実現に向けた取組を進める。		A			

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題	
数学科	学力の3要素をすべての生徒に身につけさせる指導方法を確立する。	個に応じた学習指導を行うことで、基礎的な数学力を定着させるとともに、個々の数学力がより向上するような質の高い授業を展開する。	A	A	科目担当者間で連携を密に取り、授業展開の工夫や課題内容を精選することで「学力の3要素」が身につけている。さらに、授業外での個別指導や個別に適した課題設定を行うことで、基礎的な数学力の定着を実現することができた。 今後は探究的な問いをデザインできるようにする。
		希望進路に応じた課題設定を行うことで、計算力及び論理的思考力、記述力を養い、また適宜発表活動等を取り入れながら、希望進路が実現できる数学力を培う。	A		
		BYODや中学での授業の実践を教科内で共有し、個々の教員がICTをより一層効果的に使えるようにすることで、生徒の学力伸長に繋げる。	A		
	数学を楽しみ、主体的に探究する精神を育成する。	学年や実態に応じて、生徒が興味関心を持って主体的に学び合えるような教材や思いやりを持った指導方法を教員間で共有し、実践する。	A	A	教科担当者が各々実施していることが多く、学年を越えた全体での共有をする機会が少なかったことが課題である。 題材を示し、学んだことを活かして数学の有用性を実感させ興味関心を高めさせる授業展開や課題を考えていく必要がある。
		数学に関するコンテストへの積極的な挑戦を促し、数学の魅力・面白さに触れたり、普段とは異なる数学の問題へ挑戦する機会を増やす。	B		
		数学の枠を超え、他教科・他分野の内容に触れたり、関連性を大切にしながら、数学の必要性・有用性を生徒に実感させる。	A		
	中高一貫教育および難関大学進学に向けた指導体制の充実及び教科指導力の向上を図る。	6年間を見通した授業の進度及び指導方法について、適宜教科会議で共有し、進捗状況を確認する。	B	A	来年度から始まる附属中学校の2クラス体制における授業展開について協議を行った。学びに対して探究的な学びも含め、より前向きになれるような仕掛けを考えていきたい。 スパートゼミや講習については、普通科・サイエンスリサーチ科・中高一貫生が混在したモチベーションの高い学習集団の形成ができた。
		スパートゼミ・夏期講習・冬期講習の内容や進捗状況について、教科で共有する場を適宜設定し、最難関大学進学に向けた指導方法を確立する。	A		
		「主体的な学習者」の育成に向けた授業の在り方、課題設定の在り方について、6年間を見通した段階的指導を考え、実行する。	A		
理科	主体的に学ぶ生徒の育成	ICTを活用した主体的・対話的な授業を行い、思考力・判断力・表現力の育成を行う。	B	A	ロイノートなどの授業支援ツールを活用し、主体的・対話的な指導の実践ができた。 互見授業や教科会議などを通じ、効果的な授業の在り方や指導の工夫について研究し、授業改善を行うことができた。 生徒の個々の学力や課題を共有し、普段の授業やスパートゼミ、進学補講等の指導を通して、学力を向上させることができた。
		主体的に学ぶに向かう生徒を育成を目指し、効果的な授業の在り方や課題の工夫、指導と評価の一体化について研究し、授業改善を行う。	A		
		模擬試験等を活用することで生徒の個々の学力や課題を共有する等、学力伸長に向けた組織的な指導を展開し、最難関大学合格等、自ら高い目標を持って進路を切り拓く能力を養う。	A		
	授業を起点とした探究活動の深化	観察・実験を充実させることで理科への興味を深めるとともに、生徒の挑戦心や探究心を刺激し、探究活動等において外部発表の機会や情報発信を増やす。	A	A	観察・実験を重視し、多くの演示実験や生徒実験に取り組めた。また、授業の中で探究的に学ぶ手法についても研究できた。 中高一貫6年間の教育の見直しを通して、将来的なカリキュラム検討や現在の授業改善につなげられた。
		中高一貫6年間の教育を充実させ、授業や実験の方法を見直すとともに、その成果を他クラスの授業だけでなく、サイエンス・総合的な探究の時間においても活用する。	B		

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
保健体育科	生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる。	挨拶、礼儀、時間やマナーを守るといった基本的な社会性を身につけさせる。	B	多様な活動に取り組む中で、目的を意識し、仲間と協働し課題を解決する力やコミュニケーション能力等の育成を図ることができた。 社会性については、ルールとして形だけ守るのではなく、マナーやコミュニケーションを大切に、実際の生活の場面で自然と行うことができるように繋げていきたい。
		各活動の目的を踏まえた上で、主体的かつ向上心を持って毎回の活動へ参加することができるようにする。メリハリをつけ、前向きに、粘り強く取り組む姿勢を育てる。	A	
		知識・技能を深め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにする。また、実践を通して、コミュニケーション能力や仲間と協働し課題を解決する力を向上させる。	A	
	現代社会における健康課題について深く学ばせる。	現代社会や今後の人生において起こり得る健康課題等について深く学ぶとともに、学習を自分事として捉え、自他のよりよい生活に繋げる視点で深く考えさせる。	B	
	課題学習の質を高め、活動を通して思考力・判断力・表現力を育てる。	A		
芸術科	表現や鑑賞の学習を通して、多様な芸術についての見方・考え方・とらえ方(思考力・判断力・表現力)を学び、芸術を愛好する心情を育てる。	表現や鑑賞の基礎・基本的事項をしっかりと把握させる。	A	芸術活動を通して互いを認め合う力を醸成できた。
		鑑賞や制作・発表を主体的に行い、多様な表現活動を通して互いに認め合う力が身につくよう支援する。	A	
	自分の言葉で作品を鑑賞・批評する力を育む。	日本の伝統的な芸術と西洋の伝統的な芸術の類似点や相違点を感じさせ、主体的に表現することができる力を養う。	A	発表や批評活動によって日本の伝統的な芸術や西洋音楽の魅力を味わうことができた。
		グループ発表・学習を行い、言語活動の拡充を図り、自らの言葉で諸芸術を批評できる心情を育てる。	A	
	教員の授業力の向上	研究授業や互見授業週間、研修会等を通して、教授方法などを研究し、授業改善に努める。	B	ICTやタブレットを効果的に用いることができた。 鑑賞、創作領域での新たな教材を研究することができた。 今後も積極的にICTを取り入れた授業を展開できるよう努める。
		学習者の知的好奇心を喚起させ、生徒が主体的かつ協働的に活動できる環境づくりに努める。	A	
多様な芸術について理解を深めるため、タブレットやICT機器の使用法を工夫するとともに教科指導力の向上に努める。		A		

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
英語科	基礎学力の定着と自立した学習者の育成	CAN-DOリストに基づき、4技能5領域(聞く・読む・話す(やりとり・発表)・書く)の活動を、生徒の実態に応じて授業に組み込む。各自の到達度を把握しながら、適切な目標を設定させる。	A	A	AIアプリの研究を行った。「計画・予習・授業・自習・振り返り」を一体化した学習支援に取り組んだ。その結果、自習内容と学習成果との関連を意識する生徒が増えた。 学習の定着が十分でない生徒へのよりきめ細かなフォローと、意欲の高い生徒に向けた発展的な学習内容のさらなる充実が必要である。
		目標達成に向けた具体的な学習方法を指導し、生涯にわたり英語を学び続ける姿勢を養う。	B		
		AIを活用した教育用アプリの研究・実践を進め、生徒の「学びたい」という意欲を保ちつつ、自学自習を支える課題提供と基礎学力の向上を目指す。	A		
	「英語でコミュニケーションを図りたい」という態度の育成	知識を統合し、目的・場面・状況に応じて適切に活用できる力を育む授業の在り方を研究、実施する。	A	A	Speaking Test および Writing Test を通して、英語で自分の考えを最後まで伝えようとする前向きな姿勢や、自らの誤りを振り返り、改善につなげようとする主体的な姿勢を育成することができた。 ALT等のネイティブスピーカーとのやりとりの機会を増やすことと、学習内容に応じたより詳細なフィードバックの充実が必要である。
		自分の意見を論理的に発信する力(書く・話す)を伸ばすとともに、他者の意見を尊重する姿勢を育成する。	B		
		他分掌やALTと連携し、授業内外で生の英語に触れる機会を増やす。学んだ知識を実践的に活用する場を充実させることで、英語学習への関心を高め、主体的に学ぶ意欲を引き出す。	A		
家庭科	主体的・協働的な実践活動・体験活動を通じて、よりよい生活の実現を目指す。	生徒同士が学びあう授業づくりに努める。	A	A	生徒が家庭生活を主体的に自分事として想像していきかけとなる導入を意識した授業づくりに努めた。学びあいの機会としてのグループワークやペアワークの機会を適切に実施した。 エコについての課題解決に向けた取組を各自で設定し、家庭で継続的に取り組むことで実生活に生かすことができた。
		家庭生活の構築を自分事と捉え、課題解決に向けた具体的な実践の機会を単元または学期毎に1回以上持つ。	A		
	ICTの効果的な活用を通して、生活改善に向けた主体的な姿勢を育む。	ICTの活用が時間短縮となり、その分の時間が授業内容の充実に繋がることを生かし、効果的な活用の機会を昨年より増やす。	B	B	上記を進めるために、効果的なICTの活用場面を設定し実施した。生徒のニーズや成果を捉える機会として、ロイロノートのアンケート機能や提出箱を活用し授業改善に生かすことができた。次年度の改善にも役立てたい。

令和7年度 京都府立南陽高等学校・附属中学校学校経営計画(スクールマネジメントプラン)(実施段階)【総合評価】

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
情報科	情報について科学的な見方や考え方を養い、活用できる知識や技術を習得させる。	情報の科学的理解と、情報の収集、分析、活用、発信等の実習を通して、問題の発見とその解決の方法を習得させる。	B	A	ソーシャルエンジニアリングに代表される、日常生活に隠れた「知っているが、見えていない」をテーマに課題設定を行い、知識の伝達とともに対応策を考えることで普段の生活に小さな疑問と解決策を考える姿勢を養った。
		コンピュータやネットワーク構築の仕組みに興味を持ち、家庭内などの小規模ネットワーク構築および管理ができるようにさせる。	A		
	情報倫理を身につけ、情報社会に積極的かつ公正に参画する態度を育てる。	知的財産権を含む権利について深く学び、日常生活における身近な法規を理解し、著作権の保護、肖像権への配慮に努め、情報社会の一員として社会に参画する態度を養う。	B	B	IDの紛失は年間を通じて15件程に留まり、管理意識は高まった。課題として、コンピュータ使用後のシャットダウン忘れや情報端末の置き忘れが定期的に発生しており、不正アクセスの要因となる管理不足が感じられる。
		情報化社会における個人アカウント等の機密性の高い情報の適切な管理を徹底する。また、安全性と可用性を題材として、適正な情報端末の利用を促す。	B		
	主体的に学ぶ生徒を育成する。	コンピュータ操作の基礎技能であるタイピング能力の向上に努めるとともに、生徒一人ひとりが自身の考えをプレゼンテーション作品やプログラムとして作成できる技術を養う。	A	A	基本的な順次処理、分岐処理、反復処理に加えて、関数の定義およびライブラリの利用法について時間をかけて4カ月学習を行った結果、四則計算を応用した計算問題プログラム、反応速度測定プログラムや疑似的にレジを再現したプログラムを独自にプログラミングできるようになった。
		プログラミングの基礎である順次処理、条件分岐、繰り返しについて学習を深め、自ら到達点を定めながらアルゴリズムを構築する力を育む。	A		